

## ふるさと麻生の昔と今を思う ～川崎市制百年を期して～

中山茂（ふる里を語る柿岡塾前会長）

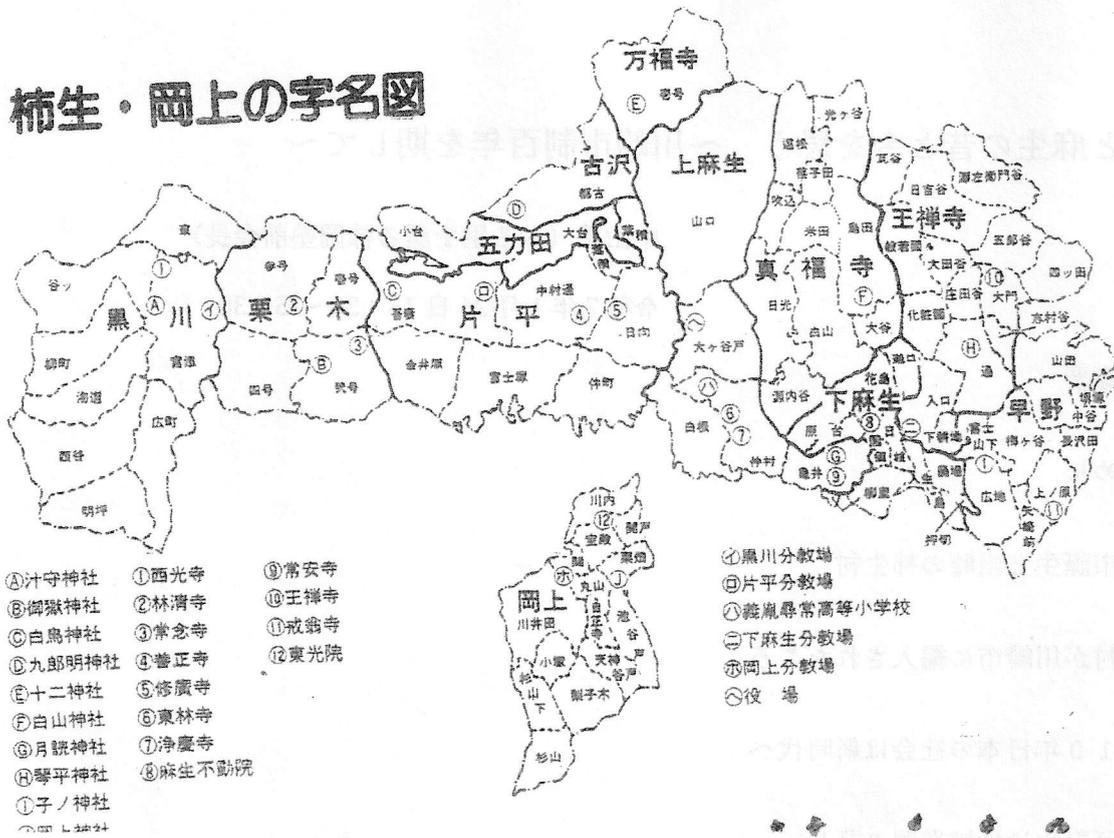
令和7年1月26日13:30～15:30

### はなしの概要

- 1 はじめに
- 2 川崎市誕生と当時の柿生村
- 3 柿生村が川崎市に編入されたころ
- 4 戦後10年日本の社会は新時代へ
- 5 麻生区誕生は地域発展の証し
- 6 ふる里柿生の昔と今を思う
  - 1 禅寺丸柿は郷土最大の遺産
  - 2 日常的に呼び慣わされていた屋号
  - 3 冠婚葬祭を仕切った組合（近所同士の地縁組織）
  - 4 祖父母による囲炉裏端の話し
  - 5 日本昔ばなし絵本に感銘した経験
  - 6 神社での出征兵士の壮行儀式
  - 7 村最大の行事、豊作を祝う村祭り
  - 8 分教場の思い出
  - 9 子どもたちのお楽しみ十五夜、十三夜のお月見
  - 10 戦後復活した草野球の楽しみ
  - 11 生活様式の変化（馬力人力から機械の時代へ）
  - 12 教育、文化、芸術、スポーツの充実
- 7 永遠のふる里

# ふる甲の移り変り

## 柿生・岡上の字名図



- ① 御獄神社
- ② 栗木
- ③ 片平
- ④ 五力田
- ⑤ 古沢
- ⑥ 上麻生
- ⑦ 真福寺
- ⑧ 下麻生
- ⑨ 早野
- ⑩ 岡上
- ⑪ 西光寺
- ⑫ 林清寺
- ⑬ 常安寺
- ⑭ 王禅寺
- ⑮ 戒翁寺
- ⑯ 東光院
- ⑰ 善正寺
- ⑱ 修廣寺
- ⑲ 東林寺
- ⑳ 浄慶寺
- ㉑ 麻生不動院
- ㉒ 黒川分教場
- ㉓ 片平分教場
- ㉔ 義胤尋常高等小学校
- ㉕ 下麻生分教場
- ㉖ 岡上分教場
- ㉗ 夜場

○村集りは柿生最大の行事

○近所隣が助けた合、組合制度は今昔に

○屋号で呼びかわる山時代の名刺と、(印字に於て事創)

○コギリンヤ (穂刈干場)

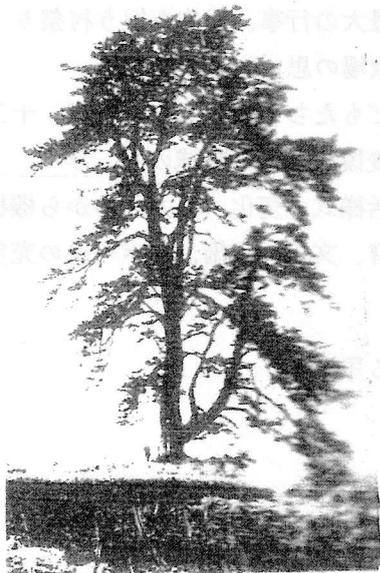
○ヨタカブト (身太川渡)

○オノコシ (追越)

○タカノス (鷹ノ巣)

### ◆主な出来事

- 動力耕耘機、脱穀機使用始まる (昭和二十九年)
- 世田谷町田線開通 (昭和三十二年)
- 弘法松が火事で焼失 (〃)
- 柿生農協・有線放送開始 (昭和三十三年)
- 柿生小学校現在地 (片平) へ移転 (昭和三十四年)
- 岡上 (杉山下地区) で土地分譲始まる (昭和三十四年)
- 早野で稲刈機、田植機の使用始まる (昭和三十六年)
- 世田谷町田線 (津久井道) 舗装道路完成 (〃)
- 柿生で初めての幼稚園・柿の実幼稚園が上麻生に開設 (昭和三十七年)
- 王禅寺の武蔵工業大学原子力研究所の原子炉が運転 (昭和三十八年)
- 柿生陸橋工事完成 (昭和三十九年)
- 柿生地区に初めて上水道の給水始まる (〃)



弘法松

# 禅寺丸柿のふる里

中山 茂

禅寺丸柿の原産地・柿生の村で

は、秋になると柿もぎ仕事が始まり

ます。各家々で行うこの仕事は、親

から子へと引き継がれていきます。

枝折り(剪定)、消毒などの作業を

経て待ち焦がれていた秋の収穫はた

いへん楽しみが多いものでした。

秋のまっ青な空に、草葺き屋根越

しに映えるまっ赤な柿の實のなる風

景はとても美しく忘れられないふる

里の原風景です。

郷土の先人が培ってきた歴史や文

化は大切に、これからの時代の若者

に伝えていきたいと願っています。

大木に登つての柿もぎは、家族中

でする仕事でしたが、当時を想い起

すたいへん懐かしく、私の心の中

には今でもその情景が鮮明にうかん

でまいます。

この想いは、もしかしたら私達以

上に、いまでも地域に残る古樹木自

身のなかに、その木の形状・木膚や葉

の呼吸がかいの中にあつて、彼らがそう

叫んでいるような気がしてなりません。

ふる里柿もぎ唄

作 中山 茂

一、庭の星根越

父さん大盛り

オーイ母さん

満杯籠の

柿もぎ仕事は

二、木の下降りた

まっ赤な柿は

母さん呟やく

紅が映って

柿もぎ仕事は

禅寺丸

柿をもぐ

来てくれと

綱降ろす

呼吸合せ

籠の中

美味しそう

その顔は

柿美人

見て楽し

三、家の子供も

手伝いするぞと

あそこの赤い實

低い枝から

柿もぎ仕事は

四、秋の日和に

草葺き屋根に

カラス来客

いい柿あるぞと

柿もぎ仕事は

柿もぎは

元気よく

もげばよい

指図する

皆でする

照る柿は

よく似合っ

舞い降りて

関の声

絵の世界